

モームに於ける「悪」

矢野道夫 (外国語研究室)

Michio YANO

'Evils' in W. S. Maugham

(1)

或る見方をすれば、悪 (evils) の問題はモーム文学の中心課題と考えられる。彼に依れば芸術はこの世の不可避的な「悪」に対する慰めとして、又それに立向う新なる勇気を与えるものとしてのみ価値づけられるからである。又他方に於て「悪」は彼の宗教観、哲学観、宇宙観等と密接に結びついて、これ等が恰も「悪」を中心として回転しているかの如くである。「悪」はモームの全思想の中心である、と云えば云過ぎであろう。だが、少く共彼の思想を解く鍵だと云うことは出来るであろう。ではこの「悪」はモームに於て、どのように提出され、どのような意味を持ち、どのように対処されるであろうか。

The Summing up に依れば、モームは人生の出発に当って1つの計画を立てた。この折角与えられた人生を最大限に善用し、そこから可能な限りのものを引き出そうとするのが彼の計画だった。その為には準備が必要である。彼は64章で次のように書いている。

「私は自からのパタン (人生模様) を作ろうとして、早くから私が対処すべき重要問題は何か、を見出そうと努めて来た。私は宇宙の一般構造に関して出来る限りの知識を得ようと望んだ。私が考慮すべきはこの地上生活のみであるか、それとも来世であるか、を決めようと望んだ。私は自由で人あるか、それとも自己の意志に従って自己を造り得るとする感情は幻影にすぎないか、を見出そうと望んだ。私はこの世に何等かの意味があるかどうか、それともそれに意味を与えようと努力しなければならないのはこの私であるのか、を知ろうと思った。そこで私は手当り次第に読み始めた。」

彼がこのような希望を若くして懐いたということは、彼の性格が几帖面で、論理的で、未来を夢見る傾向があったことを如実に示しているであろう。この性格は彼の一生を通じて変らなかつた。彼はすべて物事を順序立てて考え、いゝ加減な妥協を許さず、自分の論理と経験から信じられない事は断乎として排撃した。これは長所となつては、彼の作品をあれ丈明快簡潔にして、読者をひきずって行く魅力となつているが、同時に彼は自からの論理をすべてに適用することにより、反つて非論理を背定せざるを得なくなつたかに見える。「私に確信出来ることは一つしかない。それ

はこの世に確信出来ることは殆んどないということだ」という彼の述懐は、彼の思索と経験から来る自負心を示すであろうが、その裏面には彼の整然たる論理も結局は幻影ではあるまいか、という苦笑をひそめてはいないだろうか。兎に角、彼が人生の出発に当って提出した質問は、極めて素朴で当然すぎる質問であろう。だが、これこそ人生永遠の疑問であつて、事実彼は一生かかつてもその中の殆んどに対して完全な解答を与えたとは云われぬ。彼は解き得ない所に人間を見たと言えよう。

(2)

彼は以上の計画を実行する為、先ず宗教を検討した。彼が幼にして両親を失い、牧師をしていた叔父に育てられ乍らも反つて信仰を失つた事、更に18才で Heidelberg に遊学して信仰の違う人達を見て、人間がどんな神を信ずるかは問題でない、従つて絶対的な神はないと結論するようになったいきさつは *Oj Human Bondage* に書かれている通りで、これを *The Summing up* が裏書している。この神への不信は余りにも他愛ない話であるが、彼が告白しているように、彼が性来宗教心を欠いていたことを示すであろう。併し頭では神への信仰を失つたが、何処か魂の奥底では地獄の劫火への恐怖は残っていた。「私はもう神は信じなかつた。併し骨の髄では尚も悪魔を信じていた⁽¹⁾」と彼は書いている。独乙から帰つて医学を志したモームが努力したのは、この地獄への恐怖を放逐することだつた。彼は病院で多くの人が死ぬのを見た。何の罪もない赤坊が脳膜炎で死んで行く事實は、彼の学ぶ医学書が正しいことを彼に確認させた。人間は機械的な法則に従う機械であつて、その機械が止れば死を意味するのだ。人間は環境に対処する為「意識」に火を点じた。そしてその意識は長い年月の後、眼前の必要を満す以上に発達して「見えないもの」まで想像出来るようになったが、併し未だ神を見極めることは出来ない。彼の結論はこうだつた。「宗教とか、神の観念とかは人類が生存の便宜上進化させたからくりであつて、種の生存の為かつては価値を持つていた（そして今も持つているかもしれない）或るものを表わしているが、それは歴史的に説明されねばならない何の実体もないものである⁽²⁾」と。そして彼は表面では不可知論者と自称したが、心の奥底では神は理性ある人間が排除すべき仮説であると書いている。併しキリスト教国に生れ、キリスト教徒に囲まれて生活し乍ら、キリスト教的神と完全に袂別することはそれ程簡単ではない。それに遠い祖先から伝つて来た畏怖心に深く根ざしている神への郷愁にも似た感情をふり切ることは、論理を重んずるモームにとつても容易な業ではなかつたらう。彼が物理学の書物を読むに至つて問題は再び起つて来る。彼は星雲の想像を絶した広大さに驚嘆する。物理学者に依れば、太初に相ひき、相反撥する力が均衡を保つていたので、宇宙は数え知れない長年月にわたつて完全な平衡状態にあつた。そしてある時、この状態が破れて宇宙は平衡を失い、天文学者が教える宇宙や、我々が知つてゐる小さな地球を生じた。併しこの大宇宙を最初に創つたのは誰か。そしてその平衡状態を破つたのは何物であるか。彼は否応なしに「創始者」(creator)の観念をおしつけられたかに見える。

併しこゝで、神に対する反証として「悪」が提出されるのである。モームに於て「悪」とは何か。彼は云う「悪は眼前至る所にある。苦痛や病気、愛する者の死、貧乏、犯罪、罪悪、希望の挫折、数え上げればきりが無い⁽³⁾」。又云う「依然として地震は大破壊を続け、干ばつは穀物を荒らし、突然の洪水は人間苦心の建造物を破壊し去るであろう。人間の愚かしさは、悲しいことに、依然として戦争によって諸国民を荒廢に帰し続けるだろう。生存に不適當で、生きることが重荷となるような人間が生れ続けるだろう。強者と弱者がある限り、弱者は壁に追いつめられるであろう。人間が所有欲にとりつかれている限り（そしてこれは人間が生存する限り続くと思われる）、人間は力のない者から奪い得る限りの物をねじとるであろう。要するに人間が人間である限り、彼は堪え得る限りの悲痛に直面する覚悟が必要である⁽⁴⁾」。

モームにとって「悪」とは人間の幸福と矛盾する一切のものを指すのである。ではこのような悪とこの大宇宙の創始者とは、どのように關係するであろうか。モームは考える——もしこの宇宙を創つた者が神であるとするなら、その神は万能でなければならぬ。（万能でない者がどうしてこの廣大無辺な大宇宙を創り得よう、又万能でない神は自からの存在を説明出来ないし、自分の創つた宇宙の説明も出来ない）若しその神が万能だとするなら、わざとこの世の悪を許しておくことに於てその神は十善でない。我々は十善でなかつたり、万能でなかつたりする神を許容したり、崇拜したりすることは出来ない——と。これがモームの持論であつて彼の作品の至るところに出て来る神への反論である。この世に敵として存在する悪を立派に説明する神でなければ彼には納得出来ない。神学者共は、神が悪をこの世に創つたのは人間を訓練する為だとか、人間の罪を罰する為だとか強弁する。併し善意と活気に溢れた青年が神の訓練を受ける暇もなく呆気なく死んだり、何の汚れもない赤坊が生れて間もなく死んで行くではないか。復讐的な神を彼は到底信じられないのである。

註 (1)	<i>The Summing Up,</i>	65章
(2)	"	66章
(3)	"	68章
(4)	"	73章

(3)

次に哲学はどういうことを彼に教えたであろうか。Heidelbergで Kuno Fischer という教授から Schopenhauer の手ほどきを受けて以来、哲学は彼の論理的な性格に余程合ったと見えて、古代から近代まで色々読みあさつた跡は *The Summing Up* に明らかである。特に Spinoza に感動して大山脈を見るようだったと云っている。勿論専門家として読んだ訳ではないから解らない所は沢山あった。これに関しては「偉い哲学者同志でも解らないことがあるらしいから、素人に解らんことがあつても気が楽だ」と皮肉交りに云っている。彼が哲学から得た結論は、Fichteの言にある如く、「ある人間が選ぶ哲学はその人がどんな人間であるかに依つて決る」ということである。従

って本当に人を満足さす哲学はその人が自分で書く外はない。然もその哲学は自分にしか役立たないものである。それでもよい、自分は自分で哲学を書くことに依って、自分の計画した人生を送る助けにしようとモームは考えた。併しその時彼は40才であつて、自分で勉強して哲学を書くとすれば今後20年かかり、完成した時には死の床についていて、折角自分のみの為にかいた哲学が全然役に立たぬかもしれぬので中止した、と書いている。universal truth を求めて哲学にわけ入ったモームは遂に「哲学は十人十色」という結論をもつて出て来た。この点、哲学を失敗の歴史と観じ、⁽¹⁾ といつて宗教にも頼れず、又事実の集成たる科学にも満足せず、遂に詩 (poetry) に心の支柱を見出すに至った Matthew Arnold の歩いた道を彼も歩いたと云えるだろう。何故なら、モームは哲学を書かなかつた代りに40才にして大作 *Of Human Bondage* を書き上げたからである。そしてそこに盛られた思想は、Arnold の文学論を極度に発展さしたと見られる唯美主義が明かに看取出来るからである。自由意志があるかどうかも彼は計画通り検討した。決定論に傾いたモームが、今更自由意志を考えるのは矛盾しているように見える。併し多年の彼の経験に於て如何に多くの重要な事柄が偶然と見なさざるを得ない状態に於て起つたか、を彼は反省する。あらゆる事柄が一つの行為をひき起す要因となつていることは認めるとしても、ある行為が永遠の昔から決つていたかどうかは Dr. Broad が casual progenitors と呼ぶものがあるかどうかによつて決る。専門の哲学者、科学者が議論を止めないこの問題について、素人として結論する事は到底不可能である。普通人は兩陣営間の塀に腰を下ろして、洞ヶ峠をきめこんで、出来れば決定論の方へ足をぶら下げていた方が得策だろうとユーモラスに彼は結論している。

併し哲学が彼に与えた最大の不満は「哲学がこの世の悪を説明してくれない」ことである。「悪は善を知る為に論理的に必要なものである」とか、「この世の性質上善悪の間に対立があつて、各々が他方にとって形而上的に必要である」とかいつた議論は到底モームを満足さすことは出来ない。特に彼を怒らしたのは F. H. Bradley の見解である。Bradley に依れば「神 (the Absolute) は完全である、そして悪は虚構にすぎないから悪は全体の完成に奉仕せざるを得ない。誤謬は人生のより大きな力に寄与する。悪はより高い目的に貢献して、この意味に於て知らず知らずの中に善となつている。神は不和がある毎に豊かになる⁽²⁾」と。要するに、悪は感官の迷い以上の何物でもないというのである。この議論に対して、モームは反論の価値はないと云わんばかりに、彼が現実に見た純真な一青年の戦死を例にひいて、その光景丈で哲学者の fine-spun な (精巧だが現実そぐわぬ) 説を粉碎するに充分だと云つている。彼にとって哲学も又、悪を説明することは出来ないものである。逆に哲学が悪を説明出来ないから彼はそれを棄て去つたとも云えよう。

註 (1) 但しモームは後年、唯美主義の影響から脱出した。美の価値は人格 (character) への影響にあつて、美それ自身では大して価値がない、この世には芸術の美以上の美があると云つている。尤もこの「芸術以上のもの」を「美」と称するところに芸術家モームが残っているとも云える。

(2) *The Gentleman in the Parlour*, XXX. cf. *The Summing Up*, 63章

(4)

このように宇宙の広大に畏怖し乍らも、宗教を信じようとして信じられず、哲学に頼ることも出来ず、彼の魂は屢々遠くウパニシャッドの教えるブラーマにまで遡って行った。この間の消息は1944年出版の「剃刀の刃」が語っている。「剃刀の鋭き刃は渡るに難し、しかく救いの道は難しと賢き人云う」というウパニシャッドの引用をもつこの小説は、成程アメリカ人の気に入る大衆小説とも考えられよう。併し篇中の主要人物たる Larry の神を求めての放浪は、同時にモームの通った探求の道でもあるから、少し詳しく述べて見たい。モームはこのラリの流浪と思索の跡を語る為態々第6章を設けた。そして読者はその章をとばして貰っても話の筋が判らなくはないだろうが、それにも不拘このラリとの会話がなかったら、私はこの本を書く価値があるとは思わなかったろう、と書いている。モームがラリの遍歴に如何に重点をおいているかが判る。アメリカ生れのラリは一次大戦に飛行士として参加したが、ある日敵情視察に行つて敵の一機につけ狙われ、もう駄目だと思つた時、アイルランド生れの友人が助けに来てくれて九死に一生を得る。併しこの戦場で友人は致命傷を受けて死んで仕舞う。故国には許婚者が待っている、生命に躍動した男が自分を助ける為に一瞬にして死んで仕舞つたのだ。この世に神が存在するなら、何故このような悪が存在するだろうか。そこからラリは出発する。彼は今までの幸福な生活と恋人を棄ててパリに去る。そこで学校に通い、読書に依つて悪の存在を理解しようとするが出来ない。肉体労働に依つて何か得られるかもしれぬと思つて炭坑に入りこむ。そこの一友人から「無からは何も出て来ないから、この世は創造されたものではない。この世は神 (the eternal nature) の現われであつて、悪も善と同様神の直接の現われである」と教えられるが、このような神を彼は是認することは出来ない。次にアルサスの修道院に入り3ヶ月滞在する。そこでは、この世は神の栄光を讃える為に創られた、と教えられるが、自分が中世に生れたのならいざしらず、この現代に於てはとても信じられない。神とても人間と同じく正面から賞め上げられてばかりいたらきまりが悪いだろう。第一、神が罪を持つ人間を創つたとすれば、神は罪を犯すことを欲したと考えざるを得ないではないか。では世界は創らないが、人間よりもつと偉い神を信じてよいが、反面それを信じなければならぬ理由もない。ラリは宗教に失望して、絵画から何か得られないかと思つてスペインに行くが、これも無駄であつた。帰米の途中、偶然の事から彼は印度に滞在することになる。そこの Benares で得た輪廻 (transmigration) の思想⁽¹⁾が彼の興味を引く。この思想に依れば、生は誕生に始り死に終るのでなく、夫々が前世の行為に依つて決定される連続した生の一こまに過ぎない。善い行為は次の世に於て人間を天国に生れさせずとも知れないし、反対に悪い行為は地獄におとすかもしれない。そして真の幸福は Nirvana (解脱、仏教の涅槃) という生死の循環 (Karma) からの解放の中に求められる、とするものである。若しこの思想を受け入れたならば、この世の悪は立派に説明がつく。私に生ずる悪は前世に於て私がなした行為の酬いであるし、又私の周囲に見る悪もそれを経験している人達のかつて犯した罪悪の結果であるなら、それを平静に受け入れることも出来る。こゝに heart

と head のいずれをも蹂躪しない悪の説明がある。おまけに、モームが探しあぐねている人生の意味も解明される。全人類の $\frac{2}{3}$ が信じているこの思想に対してラリは否定もしなければ肯定もしていない。併しモームははつきりと否定している。これは solipsism と同様「信じられない」という重大な欠点をもっている、とモームは云う。さて、ラリはヒンズー教への興味を益々、そそられて研究を続ける。彼等が atman と呼び、我々が soul と呼ぶ self は肉体や精神と区別され、それは the Absolute 自身であり、それは永遠の昔から存在し the seven veils of ignorance を脱ぎすてると、又元の the infinitude に帰って行く。ラリの言を借りれば、「それは何処にもなく、又何処にもあります。万物がそれを持ち、それに依存しています。それは人格でもなく、物でもなく、原因でもありません。それには属性がないのです。それは不変や変化を超越し、全体であると同時に部分、有限であると同時に無限です。それはその充足と完成が時間と関係がない為に永遠に続くものです。それは真理であり自由そのものです」。従つて「悟り」とはこの self が the supreme self (the Absolute) と一体であることを悟ることであろう。ラリは山中の洞穴に坐っている聖者を訪れ教を乞う。その聖者は「救いにとって肝要なことは世界から隠遁することではなく、self を棄てることだ」と教える。遂にある日、誕生日を過す為に登つた山の上から日の出を眺めた時、ラリは自分が肉体から解放され、神と一体となつたような恍惚状態を感じず。これが悟り (illumination) であつたかどうかは別として、この状態は古今東西の神秘家達 (印度のブラーミン、ペルシヤのスーフィ教徒、スペインのカソリック教徒、ニューイングランドの新教徒等) が感じたと同じものであつた、とラリは云つている。同時にそれはモーム自身の体験から来るものであつたことは *The Summing Up*, 69章が語るところである。そして神秘主義の常として、この ecstasy はその人丈に通用するものであつて少しも客観性がない、又この状態は芸術家も或は恋人同志も感ずるかもしれない、とモームは付け加えている。作中のラリがこの経験から得た結論はこうである。「私は心の中にうずくような力の充実を感じました。それは世を棄てて僧庵に退くことではなく、この世に生きこの世の様々な対象物をそれ自身の為でなくそれに内在する無限なものに愛することです。私は何度も何度も生きようと欲しました。」そしてラリは彼の遍歴の出発点となつた「悪」に対する解答を迫られてこう述べる。「この問題には解答がないかもしれませんが。或は解答出来る程私が賢くないかもしれませんが。唯言える事は、悪は善の本来的な相関物 (the natural correlation of good) ではないかということです。ヒマラヤの美は地殻の激動の恐怖なしには考えられず、又支那人が如何に美しく花瓶を造ろうとも、その性質そのものから脆くないものは造れず、落せば粉々に砕けます。それと同様に我々がこの世で考える貴いものも悪と関連して存在するのです。これは勿論完全な答ではありませんが、若し悪が避けられないものなら、出来る丈それに善処する以外には道はないではないでしょうか」(大意)かくしてラリはヒンズー教と若々しいアメリカ精神との不思議な融合から悟りを得て帰国するが、作者モームにとっては問題は未だ解決されないのである。第一に、悪は善の相関物であるとしても、善は悪を補償する (compensate) するものではないからだ。成程、悪を堪え忍ぶことに依り我々は教育され向上す

る場合があるかもしれぬ。だがこれは普遍的な法則ではない。悪の一つである苦痛や貧乏は人を高めるものではなく、反つて人を狭量にし、利己的にし、復讐的にするのを誰も否定出来ない⁽²⁾。又、生命を賭けて盲人となつた兵士がヴィクトリア勲章を貰つたとて、その失明の補償となるであろうか。施し物をするという善行によつて貧乏ないざりの悪が補償されるであろうか。悪には補償もなければ説明もないのである。悪はこの世に厳存し、この宇宙秩序の必要な一部であつて、それを無視することは稚戯に類し、それに泣き喚くのは馬鹿げている。この世の悪の補償を来世に見出すことの出来る人は幸運である。信仰は理性が解き得ない困難を見事に解いてくれる。彼等は自分の信念が証明を欠いていることを知っている限り、それを信じていけない理由はない。モームは神を信じたかつた。悪を補償するか或は説明するものありとすれば、それは善ではなく神であるからだ。併しその神を求めて、探し当てたと思えたヒンズーの神ブラーマも、モームにとっては人間の想像力を満足さす遠大さをもっているが、彼を説得するには余りにも薄弱なものと考えざるを得なかつた。彼は宗教に関してこう結論している。

「特に宗教に於て、役に立つ唯一の事は客観的真理ということである。役に立つ唯一の神は、人格をもち、至高且善であり、その存在が $2+2=4$ ほどに確実な者でなければならぬ。私は神秘を看破することは出来ない。やはり私は不可知論者だ、そして不可知論から實際上結果することは神が存在しないかのように振舞うことである。」⁽³⁾

このように神を見て、然も宇宙を一元的に割切ろうとするならばモームは容易に不可知論から脱出出来ないであろう。この世に悪があるから、彼は神を肯定することも信ずることも出来なかつた。併し逆に人間は悪がある為に、それを補償又は説明する神を考えたり、信じたりするのはあるまいか。悪が存続する限り、人間は神を否定し去ることが出来ないとも云える。モームはこの二律背反の間を彷徨しつづけたと云つてよい。

註 (1) この思想については *The Narrow Corner, The Summing Up, The Gentleman in the Parlour, A Writer's Notebook*, 1930年の項等にとりあげてある。

(2) 苦痛や貧乏が人を高めず、むしろ利己的で苛酷なものにするとは、彼が病院で患者の苦しみを体験して以来の持論である。*A Writer's Notebook* 丈でも1896, 1901, 1917, 1944年の項に繰り返し言及されている。

(3) *The Summing Up*, 69章

(5)

若し、神が存在せず、従つて死後の生活を全然考慮しなくてもよいとするならば、そしてこの世は幸福の総和を遙に上廻る不幸(悪)に満ちていると誰も否定出来ないとするれば、この人生に何等かの意味があるだろうか?それともこちらの方で意味を与えねばならぬだろうか?彼が人生の出発に當つて解こうとした最後の質問である。この質問の第一に対しては彼ははっきりと答える。「人生には何の理由もなく、何の意味もないのだ。我々は小さな星の囲りを廻転する小さな衛星の短期間の住人としてここにあるのだ。」⁽¹⁾と。そして天文学者の教える所が正しければ、その衛星もいつ

かは冷却して、人類は勿論全生物は絶滅し、遠い遠い未来に於てはこの宇宙は元の何事も起らない平衡へと帰って行くのである。して見ると進化という現象も全く無意味に化しているのだ。この考えは既に *Of Human Bondage* で述べられ、それ以後現在まで変更されていないようである。では質問の第二、こういう事態に直面して人間は如何に行動すべであるか？ これに対してモームは、先人の教に従つて二つの解答を用意した。「アリストトルは、人間活動の目的は *right action* (正しい行為) だと云い、ゲーテは、人生の秘訣は生きることだと云っている。⁽²⁾」モームに依れば、ゲーテの意味したところは、人間は自己実現に達した時始めて人生を最も善用して生きている、ということになる。自己実現とは自己の所有する能力を最高度に發揮して、人生から出来る限りの喜びと、美と、感激と、興味を獲得することである。モームとしてはゲーテに従いたかつたであろう。ゲーテの企てたことは、モームが若い頃から試みて来た事と正に合致するからである。併しモームは之を否定した。自己実現の困難性は自分と同じ事を試みる他人との絶えざる衝突が起ることである。若し他人との衝突を回避出来る範囲内に於て自己実現を計るとすれば、その自己実現は知れたものである。モームはアリストトルを採つた。 *right action*こそモームがこの無意味な人生に対して用意した最後の回答であり、そして唯一の本質的な価値である。⁽³⁾では *right action*とは何か。既に述べた事より想像出来るように、 *right action*がこの無意味な人生に於て「唯一の *intrinsic value*」となる為には、それは悪を完全に放逐しないまでも何等かの對抗策となるものでなければならぬ。モームは之に対して何等の正確な定義もしていない。彼が *The Summing Up* の結びの語として説明を加えているのが唯一のものとして云つてよい。「それ (*right action*) は幸福を追求する行為ではない、若し幸福が結果するならそれは幸運な場合である。我々が知っているように、プラトンはその賢明な弟子に対して、静穏な瞑想生活を棄てて實際生活の騒擾をとるよう、そしてそうすることにより義務の要求を幸福への願望の上位におくよう命令した。そして我々は誰も、その時にも未来に於ても幸福をもたらさないと充分に承知し乍らも、ある道を時々選んで来たように思う。では *right action* とは何であろうか？ 私としては、あげられる最良の答は Fray Luis de Leon⁽⁴⁾ の答である。それに従うことは人間の弱点をもつてしても、力に余るとして震え上る程困難なものとは思われない。私はその言葉で私の書物を終ることが出来る。彼は云う、『人生の美は次の事以外にはない、即ち各人がその本性と本務に従つて行動することである』」

Fray Luisの与えた定義の意味、少く共モームが与えようとした意味はかなり明瞭であると思われる。それは可能な限り悪を除去しようとする行為を意味する。悪は人間が人間である限り全面的に除去することは不可能であろう。併しモームに依れば、「知識の増大により、多くの残酷な迷信や時代遅れの因襲を棄て去ることにより、やさしさ (*loving-kindness*) の意識を一層活潑にすることにより、人間の悩みである悪の多くが除去される⁽⁵⁾」のである。モームが示した最良の人生は、農夫が自分の土地を耕し収穫を刈りとり、労働と閑暇を楽しみ、愛し、結婚し、子供を生んで死んで行く場合であつた。これも Fray Luis の影響を受けた言葉らしいが、ここには最大限に悪の除去された世界がある。彼は好んでスペインを旅行したが、その歴史を繙いて上述の Fray Luis の

言葉に行き当った時、彼が浮べたであろう快心の微笑を我々は想像することが出来る。何故なら、モームは Fray Luis の云う通り、本性に従って自分に最も適当と思われる作家生活を送り、その本務を立派に果して来たからである。併し乍ら Fray Luis の教は一般論である。モームが指摘しているように、人間は不可避免的な悪に直面した場合には一身の幸福をなげうって難に当る事が屢々ある。モームはそこに「芸術の美以上の美」があるとし、このような高貴性を人間が発揮出来るところに、やつと絶望からの救いがあるとした。そしてこうした最高度の right action と考えられる善も、悪の補償でもなければ説明でもなく、あくまでも人生の「軽減」(extenuation)に過ぎない、と云っている⁽⁷⁾。

だが我々はここに一つの疑問が起つて来るのを感じる。モームに依れば本来利己的、自己主張的な生物である筈の人間が、どうしてこのような利他的、自己否定的な行為をなし得るであろうか。この点に関して彼は詳しく説明をしていない。そこには複雑な要素が入っているからであろう。併し、*A Writer's Notebook* の最後には次のような言葉がある。「この高貴性は(思考よりも)もつと根本的なものである。それは文化や教養に依存するものではない。それは人間のもつ最も原始的な本能に根ざしている」と。従つて我々はこの高貴性の原型として「母性愛」を考えてよいのではあるまいか? 原始人達は襲いかかつて来る環境の悪を前にして、必死になつて神を求めたであろう。然も神の顕示がない時、彼又は彼女は身を犠牲にして子孫を護つたであろう。或は神への祈願よりももつと古く、「母性愛」は存在したのである。モームは母性愛については何も云っていないようである。だが、こう考える事に依つて始めて彼の言葉が首尾一貫して来るように思われる。モームにとって right action とは、この世の悪に対して人間がなし得る最後の抗議であつたのだ。

今迄、私は「悪」を中心としてモームの思想を見て来た。最後に、彼の悪に対する考えは彼の文学に如何に現われているであろうか? 彼の芸術観は次の語に明瞭である。

「芸術が慰めであるなら、それでも充分である。この世は不可避免的な悪に満ちている、だから人間が時折隠れることの出来る避難所を持つことはよいことだ。併しそれはこの世の悪を逃避する為でなく、それに立向う新しい力をふるい起す為でなければならぬ。何故なら、芸術が人生の大きな価値と見なさるべきものなら、それは謙遜、寛容、叡智、高邁を教えねばならぬからだ。芸術の価値は美にあるのでなく、right action にある」

この言葉は芸術が悪を前にして如何なる任務を負わされているかを示すものであり、それは同時に意識するとしないにかかわらず、彼の文学が志向するところでなければならぬ。

今仮に彼の考えた悪の原因を大雑把に分類すると次の如くなるであろう。

- (1) 自然現象(地震、洪水等)
- (2) 科学の未発達(病気、迷信等)
- (3) 社会機構(貧乏、階級の不満等)
- (4) 人間の本性(所有欲、利己心等)

(5) 人間性への無知(悪人善人の観念, 誤まれた貞操観等)

この中で当然のこと乍ら、モームは(1)―(3)については余りふれていない。それは彼の任に余ることであつたし、同時に彼が主張しているように、文学の取扱う範囲外の要素が含まれているからだろう。彼が主力を注いだのは(4)と(5)である。人間性こそ彼の飽くなき関心の対象であつて、彼がその才能を十二分に発揮した独壇場である。(4)の利己心, 所有欲等は当然のものであつて、之を否定することは人間の生命力を否定することになる。人間は今後も性懲りもなく喧嘩や戦争をするであろう。唯、問題は「如何に争うか」ということになる。又、(5)から来る悪は(4)を前提とする時、自から解決される場合もあろう。だが、古来人間が人間性への無知によつて如何に不幸になつて来たか。人間性を解明し、その無知から来る不幸を指摘することにより、文学は「謙遜, 寛容, 叡知, 高邁を教え」る余地を充分にもっている。モームはそこに無数の題材を捉えた。モームが描き出した人間の姿を「悪」の観点から考察するのも興味深いことであるが、この点に関しては別稿を期したい。

註 (1) *The Summing Up*, 71章

(2) *Ibid.*

(3) 美や真等が善 (*right action* となつて行為に現われる) に従属する価値であることは別の小論で述べた。

(4) モームは *Fray Luis de Leon* (スペインの *monk, scholar, poet, 1527-1591*) が好きだったらしく、*Don Fernando* の中で相当な頁を割いて當時を偲んでいる。

(5) *The Summing Up*, 73章

(6) *A Writer's Notebook*, 1949 の最後

(7) *The Summing Up*, 終章

(8) " , 76章